

ティーチング・ポートフォリオ



竹森 裕高

九州龍谷短期大学 保育学科

作成日:平成 23 年 9 月 22 日

目次

1) 教育の責任

2) 教育の理念

3) 教育の方法

1. 視覚的情報を通しての学び
2. 実践を通しての学び
3. 実践演習やグループワークを通しての学び
4. 私自身の経験を通しての学び

4) 教育の成果と改善

1. 学生の評価とそれに対するコメント
2. 学生の評価を受けての授業の改善策

5) 今後の教育目標

★添付資料

- ①授業計画
- ②視覚的情報教材
- ③グループワークシート
- ④授業評価アンケート結果

1) 教育の責任

私は保育学科の教員として保育士資格や幼稚園教諭二種免許状取得における保健体育分野に関する科目を担当している。過去2年間の担当科目は以下のとおりである。(添付資料①)

科目名	開講年度・ 対象学年・学期	種別・特徴	受講者数
運動遊び	2010 - 2011 1年・前期	選択・専門・演習	約60名
保育内容健康	2010 1年・後期	選択・専門・演習	約60名
身体表現	2011 2年・前期	選択・専門・演習	約40名
総合表現	2010 1年・後期	選択・専門・演習	約15名
総合表現指導法	2010 - 2011 2年・通年	選択・専門・演習	約15名
生涯スポーツ (実技)	2010 2年・後期	選択・教養・演習	約40名
生涯スポーツ (講義)	2010 2年・後期	選択・教養・講義	約40名
※レクリエーション実技Ⅰ	2010 - 2011 1年・前期	選択・教養・演習	20 - 30名
※レクリエーション実技Ⅱ	2010 1年・後期	選択・教養・演習	21名
※レクリエーション概論	2010 - 2011 2年・前期	選択・教養・講義	21名
※レクリエーション実習	2010 - 2011 1,2年・通年	選択・教養・演習	21名

上の表をみると、私の担当科目は演習が中心であるが、「総合表現」「総合表現指導法」の二科目は11月に実施される「幼児教育研究発表会」に向けての授業であり、他の科目と異なり学生主導で行い、教員は助言をしている。

また、本学はレクリエーション・インストラクターの養成課程認定校である。上の表(※)のカリキュラムで構成され、全科目を担当している。資格取得を目指すにあたり、まず1年前期時に「レクリエーション実技Ⅰ」を受講することを必須条件としている。

また、授業のほか以下のような活動をしている。

- ・2010年度以降 九州龍谷短期大学附属龍谷幼稚園の4歳児、5歳児を対象とした幼児体育を週1回担当
- ・2010年度 九州龍谷短期大学公開講座（「自然の森」対象：小学生約40名）
- ・2010 - 2011 チャレンジ・スポーツ教室「からだ遊び」
（運動指導講師 対象：小学1～3年生約10名）
- ・2011年度 鳥栖市児童センター小学生夏休み教室「アクティブ教室」
（児童センター講師 対象：小学1～2年約15名、小学3～6年約30名）

園児から小学生には活動を通して『からだ』を動かすことの楽しさ、みんなで遊ぶ楽しさを実感してもらうことを目標としている。

また、九州龍谷短期大学公開講座ではレクリエーションの授業を受講する学生に企画、運営に携わることが出来るよう授業の中で取り組んでいる。

2) 教育の理念

私は保育に携わる者として、**専門知識や専門技術を学ぶとともに<ヒトとヒトとの『出会い』やヒトとコトとの『出会い』を大切に思うココロ>、<相手の気持ちを尊重し、受け入れるココロ>**を持った学生に育ててほしい。

ヒトは生まれた瞬間、両親と出会い、幼稚園や保育園、学校、社会人と年齢を重ねるたびに先輩、後輩、同級生、その家族や教職員、同僚など多くのヒトと出会う、これは避けて通ることはできない。そこでの関わりから経験する様々な出来事が自分自身を成長させることは言うまでもない。

私は本学に教員として着任する前はまだ大学院生であった。学生時代の様々な人との『出会い』が、高校時代まで人見知りで人付き合いが苦手な私を変えてくれた。健康教室や運動教室での子どもや高齢者などの参加者に会い、参加者の喜ぶ笑顔や楽しむ姿に癒された。そこでの仲間との出会いや部活動での良き友であり良きライバルとの出会いは仲良くするだけでなく衝突することも少なくなかったが、逆に相手の気持ちを再確認できるきっかけを与えてくれたことに感謝をしている。この経験がヒトとの関わり物の大切さを改めて再確認するとともに、新しい自分を発見できた喜びを実感できたことが今の自分を形成していると感じている。

何がきっかけとなり、自分自身に影響を及ぼすかわからない。そのためにもヒトと関わることは必要不可欠であり、自分を高めていくためにも貴重な体験であることは間違いない。このような経験を学生にはたくさん経験してもらい、『出会い』と「ヒトと関わること」の大切さを実感するとともに、相手の気持ちを受け入れることの必要性を実感してほしい。

また、人生の中で様々な出来事を経験する。経験するということは「出会う」ことであり、『遊び』という観点では<遊びに出会う>、<遊び道具に出会う><遊び仲間と出会う>など様々である。つまり、遊びにはヒトとヒトとの出会い、ヒトとコトとの出

会いにつながる要素が存在する。しかし、私たちの少年時代は当たり前にあった、『遊び』の必要条件である「3つの間」（時間・空間・仲間）を現代の子どもたちは確保することが困難になっており、遊べなくなっており、出会う機会が限られてきている。

この現状を踏まえ、学生自身にも様々な『遊び』を体験していく中で子ども時代に『遊び』に出会った時の喜びを再確認し、＜みんなで遊ぶ楽しさ＞や＜からだを動かす大切さ＞を実感してほしい。

特に、幼児期においては運動・スポーツ文化に初めて出会う時期である。その大事な幼児期に保育者として携わるためにも、学生には＜なぜ幼児期にカラダを動かすことが大切とされるのか＞＜子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか＞を考えながら子どもたちに『遊び』に出会う喜び』『遊び』を楽しみと思えるココロを伝えてほしい。

また、子どもの成長には家族、地域、そして学校の関わりが大きく、その中で、幼児期に携わる保育者は「保育のプロ」として子どもの成長に責任を持つ役割が与えられる。

しかし、保育現場では保育の知識や技術を習得したからといってすぐに力が発揮されるかというところを言えない。そこには、「子どもとの関わり」「子どもの保護者、家族との関わり」「職員との関わり」「地域との関わり」があるように知識、技術だけでは対応できない場面が多く存在する。その関わりには対話や活動などのやりとりがあり、共通して言えることは双方の関わり方にも「ココロ」があるということである。そのためにも相手がいてこそその保育の中でヒトと関わっていくために「ココロのやりとり」が求められると考える。

学生をみていると自分の考えと異なることに会おうとすぐに逃げようとする姿がみられ、困難な課題に向き合おうとしない傾向がある。相手の気持ちを確認する前に自ら壁を作り、ヒトと関わるチャンスを逃してしまい、これでは「ココロのやりとり」は生まれない。保育者として携わるためにはその課題にもしっかりと向き合い、相手の気持ちを尊重し受け入れるココロを持てるような学生を育てていきたい。

以上のことから、私は知識や技術に優れた保育者の育成を目指すとともに、「ココロ」を大切にできる学生を育てたい。

3) 教育の方法

1. 視覚的情報を通しての学び【知識や技術の習得】

「運動遊び」や「保育内容健康」の授業では『遊び』などといった子どもたちの現状を把握することも重要であり、理解した上で実践に入るようにしている。言葉だけでは実感しにくい内容でも映像を通して学習することで＜遊びに関する現代の子どもの様子＞や＜活動の場の提供の環境設定＞について学生がイメージ出来るようにしている。

また、レクリエーションの授業では、公開講座など学生が企画や運営に携わる行事がある。ほとんどの学生が初めて関わる行事が多いため、映像を通して「何をしているの

か」「どのような手順で行っているのか」など一人一人がしっかり把握できるよう心掛けています。(添付資料②)

2. 実践を通しての学び【出会いを大切に思うココロ】

私の授業の主活動は「からだを動かす」ことである。実際に活動していく中で、学生自身もたくさんの遊びやゲームと出会い、様々な遊び方・遊び道具に出会う。その中で、「運動遊び」ではくなく、幼児期にその『遊び』が必要なのか>、「レクリエーション実技」ではくなく、多くのヒトと関わっていく手段としてなぜこのゲームが必要なのか>を問いかけたり、遊びをより楽しむにはどのような工夫が必要なのか子どもの視点、保育者の視点から学生自身に考えさせたりしながら、学生の遊びの引き出しを増やせるような授業を展開することを心掛けている。

3. 実践演習やグループワークを通しての学び【相手の気持ちを受け入れるココロ】

これは、ただ体験するばかりでは一方的な授業になるため、実践演習やグループワークを取り入れることで学生に自発的に授業に取り組めるようにするためである。

レクリエーションの授業では、受講生に1人で実践演習をする時間(15分程度)を設けている。また、グループワークでは課題に対してまずは一人で考える時間を与え、その意見を基にグループワークを行うようにしている。学生自身が遊びを考えたり、課題に対して他者の考えを知ることができたり、また、相手の意見に向き合い、互いに意見を出し合うことで、様々な視点からの気づきや自分自身の課題が発見できるきっかけをつくり出しながら学生の授業に対する意欲が増すように努めている。(添付資料③)

4. 私自身の経験を通しての学び【知識や技術の習得】

私は教員として経験も少なく、幼児教育についての研究でもまだまだ勉強不足である。そこで、授業では幼稚園や運動教室での私自身の子どもの関わり方やそこでの体験談を学生に話すようにしている。成功例も失敗例も実体験は学生にとっては生の声であり、実態を把握するいい機会ではないかと考える。

4) 教育の成果と改善

1. 学生の評価とそれに対するコメント

九州龍谷短期大学では2010年度後期、2011年度前期に学生による授業評価アンケートを実施しており、アンケートの提出を学生に義務付けている。

評価は①非常にそうである(4点) ②そうである(3点) ③あまりそうでない(2点) ④全くそうでない(1点)の四段階評価とし、平均した数値を下の表に示している。

以下に、そのアンケート結果の1例(抜粋)を示す。(添付資料④)

授業科目：運動遊び (1組)月曜1校時, (2組)月曜2校時

実施日：平成 23 年 7 月 25 日

実施対象者数：58 名

学科：保育学科

	<学生自身について>	評価平均
1	授業に毎回出席した。	3.63
2	予習や復習をして授業に臨んだ	2.60
3	授業に遅刻することなく受講した	3.69
	<授業内容及び授業方法>	
4	授業の目的・目標ははっきりと示された	3.39
5	授業は授業計画（シラバス）に沿って行われた	3.25
6	板書やパワーポイント等の画面は見やすかった	2.95
7	テキストや教材は適切に活用された	2.90
8	いろいろと工夫し熱意をもって授業が行われた	3.36
9	声や言葉は明瞭で聞き取りやすかった。	3.41
10	説明は十分でわかりやすかった	3.36
11	授業の進行速度は適切だった	3.41
12	受講生の反応をみながら授業を進めた	3.49
13	授業は理解しやすかった	3.40
14	授業で知的な好奇心が刺激された	3.47
15	授業によってこの科目に対する意欲が増した	3.42
	<教員の対応>	
16	受講生からの質問や要望等に適切に対応した	3.40
17	授業にどの程度満足しましたか	3.48

全ての項目における平均数値は 4 点満点である。ほとんどの質問項目で平均数値が 3 点以上であり、学生が積極的に取り組む姿勢がみられ、この授業は受け入れられたことが分かる。実技を中心とした授業だったことから、学生の意欲も高く、授業をしやすいように思える。

授業に対するコメントをみると、「楽しかった」「分かりやすかった」「様々な遊びを学べて現場で活かしたい」などが多く、授業に対して学生が積極的に取り組んだ姿勢が見受けられた。また、中には「多くの人と接することが出来て良かった」という意見もあり、私の教育理念のキーワードでもある「人との関わり」の観点で学びとる学生もいたことは評価に値すると思われる。

しかし、(6)『板書やパワーポイント等の画面は見やすかった』や(7)『テキストや教材は適切に活用された』において点数が低かったことから学生に効果的であったとは言えず、コメントをみても「もっと字を大きく書いてほしかった」「テキストがもったいな

かった」という意見があり、板書の見やすい書き方やテキストの効果的な使い方を検討し、改善することに努めなければならない。

2. 学生の評価を受けての授業の改善策

アンケート結果をもとに板書の書き方やテキストや教材などの使い方が学生にとって効果的でないことが分かる。板書に関しては、実技系のため板書する機会は少なく、板書をしたとしても要点を書くだけに留まっており、学生の目線で考える配慮が必要である。テキストも終わり間際に目を通す程度に留まっているため、授業の要点が分かりにくかったのではないかと考えられ、テキストで様々な遊びが紹介されているが、特に何が大事なのか明確にしていきたい。これは、他の授業科目でも同様のことが言えるであろう。

また、学生のコメントをみると、「楽しかった」「わかりやすかった」などの抽象的な評価が多く、具体的な評価を得る所までには至らなかった。つまり、ほとんどの学生にとっては授業の中で楽しい体験を行ったに留まっているのではないかと考えられる。今までは授業の最後に簡単な感想を書かせていたが、授業に反映させることがなかった。演習プリントを提出させることで「授業で何を学んだのか」、「何が分からなかったのか」といった〈学生が授業で何を感じたのか〉を確認するとともに、次回の授業に反映させ、学生に何を伝えたいかより明確にしていかなければならない。

教育の方法③『実践演習・グループワークを通して』について、カリキュラム上時間数に余裕のある「レクリエーション実技」でのみ実践演習を行っており、「運動遊び」ではそのような時間が確保できず、運動指導法については映像を通しての学習に留まっているのが現状である。その限られた時間の中で、遊びを考え、発表する場を確保できるよう時間の使い方を改善していかなければならない。

5) 今後の教育目標

このティーチング・ポートフォリオを作成するに当たり、着任以降、単に授業をこなすことだけに時間を費やしている状態であり、教育理念と教育方法の一貫性に欠けた授業をしてしまっていることが露呈された。「こんな学生になってほしい」という思いだけが浮いた状態となり、自分自身の知識・技術が全く追いついていないことを痛感し、まずは自分自身をスキルアップさせることが求められる。

そのためにも、園児や小学生を対象に子どもが興味・関心を持ち、遊びを楽しみと思えるような活動研究を進め、運動教室や幼児体育などを通して自分自身の経験を積みながら、子どもに対して『運動遊びの伝達人』となるべく研究に努めたい。その成果は運動遊びを展開する中で子どもの様子や活動の雰囲気から必要に応じて学生にフィードバックしていけるよう努めたい。

また、社会人学生が増加傾向にある中、学生の生活環境は様々である。本学科では個別アドバイザー制度を設け、個別面談などを行っている。学生の現状把握など授業以外

における学生へのケアをしていきながら、授業を展開していく上でレベル・状況に応じた授業づくりに努めたい。